

## 第2回真鶴町学校建設準備委員会 議事録

日時：令和5年9月22日（金）14時00分～16時25分

場所：真鶴町民センター2階 第2会議室

委員：長澤 悟（学識経験者）	竹原 和泉（学識経験者）
藤井 明香（公募）	玉田 麻里（公募）
山口 稚奈（幼稚園PTA）	勝山 匡（小中学校PTA）
朝倉 隆（真鶴町自治会連合会）	古川 昌子（民生児童委員協議会）
伊藤 晴美（人権擁護委員会）	倉澤 良一（ひなづる幼稚園）
露木 寛子（まなづる小学校）	市川 麻美（真鶴中学校）
上甲 新太郎（副町長代理）	瀨瀬 仁志（教育長）
瀧本 朝光（教育委員）…欠席	<敬称略>

### 教育長挨拶

- ・皆さん、こんにちは。くじ引きで席を決めたが、今回は今、ワールドカップが開かれているラグビーにちなんだものとした。これを考えたのは、事務局の指導主事で、この準備委員会にかける思いを聞いてきたので紹介する。
- ・「ラグビーは身体の大きい、小さいに応じた様々なポジションが15存在し、どんなプレーヤーにも役割が与えられます。『ワン・チーム』という言葉は2019年に流行語にもなった、ラグビーでは有名な言葉ですが、チームは、ただ単に人が集合した状態を意味するものではありません。同じ思いを分かち合っている。一つの方向に向かっている。心を合わせてこそ、チームなのです。15人にはそれぞれ役割があります。一つの理想や思いを分かち合い、互いに認め合い、補い合い、チームになるのです。」
- ・この準備委員会も15人のメンバーで構成されている。15人でスクラムを組んで、今日も実りの多い会にしていきたいと思う。

### 進行役の選出（事務局）

- ・瀧本委員長は体調不良で欠席。本来であれば長澤副委員長に進行役をお願いするところであるが、本日、長澤副委員長には情報提供をしていただく予定なので、進行役に代理として市川委員をお願いしたいがどうか。（承認）

### 市川委員挨拶

- ・いつも以上に緊張するが、指導主事からのメッセージのとおり、皆さん「ワン・チーム」という気持ちでお願いしたいと思う。
- ・それでは、次第に沿って進めていく。まず、報告「第1回学校建設準備委員会」「第1回教育を語り合う会」を、事務局からお願いする。

## 報告

### ○第1回学校建設準備委員会について（事務局から）

- ・すでに、ホームページ上に掲載しているが、委員長・副委員長の選出、これまでの経緯の説明のあと、委員の皆さんに「新しい学校にかける思い」を語っていただいた。これらの思いが、一つ一つ形になっていけばと考えている。

### ○第1回教育を語り合う会について（事務局から）

- ・これもホームページ上に掲載しているものである。7月22日に行い、41名の参加があった。
- ・最初のワークショップでは、「あなたにとっての学校は？」というテーマで話し合い、人との出会い、勉強、部活動、給食、テストなど様々な思いを語っていただいた。
- ・今までの経緯と語り合う会の趣旨などを説明したあと、2度目のワークショップでは、「どんな学校を未来の子どもたちに？」というテーマで話し合い、キーワードとして『自分らしく』『地域・コミュニティ』『校舎・校庭・施設』『真鶴らしさ』『学校のカリキュラム』『防犯・防災・安全』『教職員の働く環境』『給食』が挙げられた。貴重な意見をいただいた。基本構想の中にもいくつかを反映させたいと考えている。

### ○幼稚園・保育所の将来を考える会について（倉澤委員から）

- ・8月17日（木）に行った。教育課・福祉課両課の課長・担当者と、貴船愛児園・石田保育園・ひなづる幼稚園3園の園長が集まり、現在検討中の一貫教育校の中に幼稚園、保育園を含めるべきかを協議した。
- ・乳幼児期の生活環境と小中学生の生活環境では違いがあるということで、一貫教育校には含めないほうが良いという意見をいただいた。
- ・幼稚園も考え方は保育園と同じだが、公立学校における一貫教育という観点から、そのつながりは大切にしていきたいと考えている。

## 市川委員（進行）

- ・方向性は出ているようだが、学校建設準備委員会としての最終判断は次回としたいがどうか。（承認）
- ・では、次に協議「一貫教育校の形態」について話し合いたいと思う。前回、長澤副委員長から小中が一体となった義務教育学校について、情報提供をお願いしたい。

## 協議

### ○一貫教育校の形態について

#### 長澤委員からの情報提供（スライドを映写しながら）

- ・同じ言葉を使っても、イメージが人によって違うことがある。イメージを共有するための情報提供である。今、どのような学校ができているのか、義務教育学校2つを中心に紹介する。

- ・一つは福島県大熊町の学校で、震災の被害を受けた地域である。昨日、竣工式があり出席してきた。0歳から15歳までを一貫して教育するという考えのもと進められている。避難解除はされたものの、まだ帰還していない町民も多い。子ども31人に対し、教職員は40人くらい。
- ・もう一つは、北海道の胆振東部地震で被災した中学校と、老朽化した小学校とが統合し、こども園も一緒になり、義務教育学校として再スタートしている学校を紹介する。
- ・まず、学校改革の背景と課題であるが、学校が求められている改革の一つに義務教育学校、小中一貫教育がある。9年間を見通して、地域総がかりで子どもを育てていくことが求められている。学校施設をめぐる状況として、新型コロナや少子化、災害の激甚化なども考えていかなければいけない。特に公共施設マネジメントとして、地域の側から子どもの育ちを支える環境・施設を整えていく必要がある。学校、公民館といった枠組みを超えた施設が各地で作られている。それはどこかに正解があるわけではなく、地域の実情に合わせて答えを見つけ出していくことになる。真鶴町では、この準備委員会や語る会がそれにあたり、町民が一体となって、子どもの教育を考える体制が取られていると感じる。
- ・昨年、文部科学省から「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方」の報告書が出された。これからの学校づくりのベースになる。自分はその座長を務めていた。「未来志向」とは従来の固定観念から脱却して、子どもそのものや子どもの将来を見つめて、新しい学びを考えていく、地域みんなの学校として捉えていくこと。「実空間の価値を捉え直す」とは、デジタル化が進む社会で子どもを育てていくということと、デジタル化の技術を生かして、従来は考えられなかった教育方法を取り入れることで、多様な学びを実現していくということ。そのような中で、実際の空間を大切にすることも重要。その空間が快適であったり、自分の居場所であったり、そして、最も大切なことは、友だちや先生、地域の人たちと一緒に学べる空間であること。学び合い、助け合い、ふれ合いの「合」と、ほかの人たちとの出会いの「会」、ほかにも愛情の「愛」、これからの時代はAIの「AI」も含めて、「あい」がキーワードになると思う。
- ・報告書では大きなフレームが描かれており、「学び」を太い幹として中心に置き、そこに広がる空間として豊かな「生活」、地域と一緒に子どもを育てていく「共創」、それをしっかり支える根っことして、災害や事故に対する、地域を含めた「安全」、快適で健康的な、地球環境にも配慮した「環境」を示している。
- ・「未来志向」の視点として、新しい時代の学びのビジョン・目標を共有すること、固定的な考えに捉われないで、横断的な学び、多様な集団に柔軟に対応していくこと、学校施設全体が学びの場、交流の場であると捉え直していくことが指摘されている。
- ・これから見てもらう学校は、正解ということではなく、これからの学校づくりのヒントになると思う。学校規模や地域性などと照らし合わせて見てもらうと良いと思う。
- ・教室は四角いものと思っているが、そうではない教室もある。先生のコーナーがあったり、多目的スペースがあったり。教室の後ろにロッカーがあるというイメージをみんなもっているが、共通したイメージがあると、そこから抜け出した議論になかなかならない。教室の後ろにロッカーがあるのは、日本の学校だけ。欧米の学校でもアジアの学校でもない。ロッカーを教

室の外に出すことで、教室全体を学びの環境として整えることができる。後ろの壁も、協働的な学びを支えていく場所として考えていくことができる。

- ・通常考える学校は正面に黒板、後ろにロッカー、左側に窓というイメージだが、北海道の学校ではいろいろな方向に壁があり、教室周りが豊かな生活の場になるように工夫している。大熊町の学校ではいろいろな形の教室が組み合わさって、学級を超えた学習の場を保障している。ただし、これは少ない人数だからという側面もある。少人数だから教室を小さくするのではなく、この規模だからできる教育や、学びを支える教室環境を整えることが大切。教室からつながったところに多目的スペース、オープンスペースがあり、様々な家具やメディアが置かれ、多様な学習が展開されている。
- ・一方で中学校の場合は教科担任制なので、教科の先生が子どもたちをいざなう自由な環境づくりができるようになっている。今までの普通教室では、複数の教科で共有することになるから、できないことも多い。数学の先生がこうしたいと思っても、次の授業が英語であれば難しくなる。教科ごとに専用教室を設けることで、豊かな学びの場となる。小学校の教室は作品などが飾られているが、中学校の教室は無性格になりがち。これは先生方の問題ではなく、自由に使える空間がないからである。
- ・義務教育学校の場合は、1年生から9年生まで幅広く集まり、体格差も大きく、社会に対する意識も違う。9年間の中で、いかに成長を感じられる空間を用意できるかということが、施設環境を考える時に大きな課題となる。例えば、1・2年生の時は、ほとんど教室の中で生活するため、総合的な環境づくりが大切になる。3・4年生になって少しずつ特別教室に出かけていく。後期の段階に入れば自ら教室に向いていくなど、学校の中での行動様式が変化することで、成長を意識させることもできる。
- ・一般の中学校では教科専用教室・教科センターを作ることに、反対する先生が多い。生徒が移動することに対して心配があるのだろう。しかし、義務教育学校の場合は、生活の変化を用意するという観点が大事だという認識が先生たちにも多く、このような教室を設けることが多い。
- ・図書館も読書の場だけではなく、様々な学びの場、交流の場、ホッとできる自分の居場所にもなるという観点が、非常に重要な場所になってくると思う。また、地域に開かれた学校を作るという点でも、図書館を学校の中心に置くことは重要になってくる。私立学校の例だが、主体的に学ぶ子どもを育てたいということから、時間・空間を超えた図書館がそれを支えるものと位置づけ、学校の中心に置かれている。アクティブラーニングの場所にもなり、外国ともつながる場所にもなっている。
- ・特別教室もワクワクする空間として、子どもたちが創意をもって工夫し、自分で試したり作ったり、助け合ったり褒め合ったり、本物の活動の場所として捉え直していければと思う。
- ・教室の中だけではなく、外側も大事だということで、学校全体を博物館のように考え、学校全体が学びの場であるという意識も大切である。
- ・新しい教育を創り出していくのは、先生方である。先生方がストレスなく作業ができる、相談ができる、ふれ合うことができる、指導力を高めることができるような空間を用意することも

- 重要な視点。従来の職員室は、個人の机が並び、学年の島ができていた形。しかし、新しい学校では、先生方が休んだり打合せをしたりする、広いスペースが用意されている場合が多い。個人のスペースもあって良いが、共用のスペースを広く取ることで、新たな活動が生まれやすくなる。リフレッシュできる大きなソファを置き、リビングルームのようにしている例もある。ネットワーク環境が整い、座る場所と机があれば、先生たちにとっても学びの場になる。
- ・学校内に座ることのできる場所が多くあれば、子どもたちにとっても自分の居場所を見つけやすくなる。ただ勉強にやってくる場所ではなくて、自分の場所になっていく。
  - ・みんなが集まれる場所として、講堂やホールだけでなく、階段を少し大きく取ることで、それが可能になる。学校全体が一体感をもてるようにすることが大切。
  - ・小学1年生の子にトイレの絵を描いてもらった。この絵は、建築をする者にとって一番基本になる絵だと思っている。用を足すだけでなく、最後にホッとできる場所がトイレ。学校では自分の椅子以外に、自分が座れる場所がない。ここに座った時に、ホッとできる。学校全体の場所・空間を、いかにして豊かにしていくか、ホッとできる場所にしていくか。明るく楽しいトイレを作ったら、しばらくして児童会の「トイレであそばないで」のポスターが貼られていた。トイレが遊び場所になるくらいになっている。学校のトイレは住宅や公共のトイレとも違って、非常に特殊である。いじめの場所になったり、「もうトイレに行かない」となったり、身体を壊したり不登校の原因になったりすることがある。子どもの気持ちを考えて、トイレを考えていきたい。
  - ・地域と学校との関わりでいくと、阿智村立浪合学校では、村民がいつでも学校に行かれるようにしようと、学校名を小中学校ではなく、大人も含めた「浪合学校」とした。また、公共施設マネジメントの一つとして、ある中学校では図書館や郷土芸能を楽しめるホールが欲しいということで、財政的に単独では厳しかったが、中学校との複合施設として新たに建設した。2階には中学校の図書館もあり、中学生は1階の町の図書館も利用できる。町民は1階だけ利用できるようになっていく。複合させることで、子どもたちもホールが利用でき、町民も学校の施設が利用できるようになる。学校と地域がWin-Winの関係になっている。
  - ・東松島市で震災後に建てられた小学校。学校が地域の活動を支える重要な場所になっている。運動場、ホール、図書館などが町の顔になり、NPOなど地域の人たちが中心になって、子どもの教育を支えている。
  - ・陸前高田市で震災後に建てられた小学校。中心に図書館が置かれ、地域からの強い要望で太鼓の指導や披露ができるホールが作られている。日常的に地域の方々が様々な活動に参加できるようになっている。みんなの学校ということで、地域の人たちが総出で大掃除をしている。真鶴もこのようなことができる町だと感じている。都市部では難しいかも知れないが、真鶴でできることは何だろうと考えて欲しい。
  - ・石巻市で震災後に高台に建てられた小中学校。ここも、みんなの学校という考え方で特別教室、図書館、体育館などを配置し、地域の人たち用の入り口を作り、ラウンジは土足のまま入れるようになっていく。

- ・大熊町の義務教育学校。「学び舎ゆめの森」という名は、清水寺の貫主が命名。学校の中心に図書館、みんなが一体となれるようなホールを1階に作り、その周りに特別教室、体育館、教室などを配置。小学校ゾーンと中学校ゾーンを分けている。教科ごとに教室が作られている。教室名も子どもたちとアイデアを出し合い、「のびのび学び室」「ふむふむ研究所」「ワクワク本の広場」「キラキラお話の庭」などと名づけ、その学びに相応しい場所が選べるようになっている。子どもたちが戻って来なければ、町の将来はない。ここでしか学べない、ここでないと活動できない、ここだけの学校ということを目標に、テーマを「学校らしくない学校」として建設を進めた。職員室の前のカウンターは、子どもが先生に質問し勉強する場にもなっている。
- ・北海道胆振東部地震の震災から復興した安平町の義務教育学校。テーマは「自分が世界と出会う場所」。図書館を中心に両側に体育館を配置。地域の人たちがいつでも使える調理室や工作室も用意。小中の一体感をどう作るか、地域と学校との関わりをどう作るかが課題であった。その一つが図書館であり、町民ラウンジである。自然、地域、文化、人という町の宝を、どう学校の中に取り込んでいくか、一度テーブルに乗せて検討していくことが大切。老朽化していた町の図書館と学校の図書館を一体化した。町の司書もここで働いている。町民ラウンジには薪ストーブやラウンジチェアが置かれていて、いつでも来館できるようになっている。真鶴には立派な図書館があるので、テーマの立て方は若干違ってくると思うが、町民の方がいつでも来られるような工夫が必要だと思う。図書館から地域の人たちが活動するキッチンやアトリエを見ることができる。地域の人たちからも子どもたちの様子を見ることができる。中体育館（ホール）からも同じ。ホールのステージが音楽室になっている。欲しいものすべてを盛り込むことはできないので、重ねられるものは重ねるなど工夫して、敷地を有効に使うことも大切である。中心になるもの（図書館やホール）を考え、モールを作っていくような感じになる。互いが見え合い、一緒に育っていくことが大切。中学生も小学校低学年の子を、本当によく面倒をみる。頼られれば嬉しそうにする。小さい子にとっても、お兄さん、お姉さんは頼りになる。モール全体が町になっている。
- ・特別支援教育の場所を用意することも、大事なテーマになる。小学校ゾーンにも支援ルーム、中学校ゾーンにも支援ルームを作っている。友だちと一緒に、学年が上がれば場所も移っていくように工夫されている。これも正解というわけではなく、真鶴ではどうするかを考えていく必要がある。支援ルームでも一つの部屋にいろいろなコーナーを設けたりしている。トイレの色は、町が交流している外国の国旗の色を採用している。
- ・義務教育学校が生まれてきた背景の一つには、小中学校の先生の連携の必要性がある。互いによく知らない中で、子どもが育っていた。どう目標を共有しながら育てていくかが、これからは大切。先生たちは共用のスペースで仕事をしているが、自分の席を設けるかどうかは、これから決めていけば良い。今までは個人机や袖机があり、その周りに物が置かれているという状況。一人で集中したい時には、カウンター席が有効である。個人の持ち物はロッカーに入れ、共通の物の保管場所も別に用意されている。学校の運営と併せて職員室をどう考えていくか、大きなテーマになってくる。校長室もみんなと一緒にいられるような作りになっている。

- ・地域の人が入ってくる場合、セキュリティが問題となる。機械化を図り、カードで入室。特別教室の使用は学校優先で、空いている時だけ専用の出入り口から入ることができる。地域の人たちが主体的に管理できる体制になっている。
- ・文部科学省の資料については、一貫教育校や義務教育学校のどこが評価され、どこが課題となっているかがまとめられている。議論の参考にしてもらえればと思う。

#### 市川委員（進行）

- ・では続いて、事務局から「資料：一貫教育校について」と「資料：義務教育学校と小中一貫型小学校・中学校との比較」の説明をお願いします。

#### 資料「一貫教育校について」の説明（事務局から）

- ・「真鶴町学校教育あり方検討会」の報告書から抜粋したもので、一貫教育校の定義と類型、一貫教育校による効果と課題、真鶴町が一貫教育校を採用した場合の考察を一覧にしたもの。
- ・表面では、一貫教育校で期待される効果として、集団規模の確保、多様性の確保、9年間の系統的な指導体制による学力の向上、また、中1ギャップをはじめとする指導上の課題の減少などが挙げられている。
- ・裏面では、心配される課題として、人間関係の固定化、小学6年生の自覚と責任を育む機会の喪失、さらには、新しい仕組みに対する先生たちの負担などが挙げられている。
- ・真鶴町が採用した場合の考察については、校舎建設に必要な敷地、あるいは一貫教育の良さをより引き出したいという思いの中で、事務局としては、少なくとも施設分離型や施設隣接型は難しいかなと考えている。

#### 資料「義務教育学校と小中一貫型小学校・中学校との比較」の説明（事務局から）

- ・義務教育学校と小中一貫型小学校・中学校とを、学校組織、あるいは一貫教育校として、一般的に行われている取り組みが可能かどうかを比較したもの。
- ・義務教育学校の場合は校長が1人だが、小中一貫型の場合は、小中それぞれ1人となる。しかし、管理職を含めた養護教諭、事務職員の総計は、定数上同じ人数になる。
- ・修業年数は、義務教育学校は9年だが、小中一貫型では小学校6年と中学校3年となり、職員組織も義務教育学校は一つだが、小中一貫型では小中それぞれに設けられる。
- ・一貫教育校の特徴的な取り組みである学年の区切りだが、施設分離型や施設隣接型でも理論上は可能だが、校舎が別々であることから、現実的ではないだろうと判断している。
- ・小中一貫校のメリットでもある小学校での教科担任制や、教員の相互乗り入れについては、施設一体型のほうが当然行いやすくなる。
- ・しかし、教員の負担を考えると、日課・行事等の調整や施設・校庭の調整など、新しい仕組みが機能するまでは、負担感も大きくなることが想像できる。
- ・近隣との関係では、義務教育学校となった場合、県西地区では初めての形態となるので、最初はいくつかの調整が必要になってくる。

### 市川委員（進行）

- ・長澤副委員長からの情報提供、事務局からの資料説明を受けて、「一貫教育校の形態」について協議していきたいと思う。視点として、施設一体型か施設隣接型か施設分離型か、義務教育学校か一貫型の小中学校か、さらに義務教育学校の不安要素やメリットについても考えていきたい。事務局からの説明なども参考にしながら、ご意見をいただきたい。
- ・立地的にも施設一体型のほうが良いのではないかと、個人的には考えているがどうだろうか。

### 古川委員

- ・素晴らしい事例を紹介していただいて、自分も施設一体型が良いと考える。それに合わせて、地域の方々の居場所にもなるような施設になればと思う。義務教育学校については、教育の専門の方の意見を聞いていきたい。

### 朝倉委員

- ・義務教育学校では原則、小中免許を併有となっているが、現実的には難しいところが多いようだ。様々な面で自由度が高いように感じるので、施設一体型のほうが良いのではないかとと思う。土地も有り余っているわけではないので、施設隣接型、施設分離型は難しいと考える。

### 竹原委員

- ・施設一体型は、皆さんと同じように良いと思う。義務教育学校でのプラス面は、校長が1人で一体的に推進する時の要になること。それぞれに校長がいると組織も分かれてしまい、一体型と言いつつ見えない壁が出てきてしまうのではないかと。
- ・教員免許については、岩手県の大槌学園に確認したところ、現在50人の教員のうち、小中の免許両方を持っているのは20人ということであった。最初はもっと少なく、大槌学園の教育に関心のある教員などが少しずつ集まって、今の人数になったらしい。スタート時点で免許併有の教員が少なくても、徐々に増やしていけば、十分にクリアできるのではないかとと思う。相互乗り入れについても、中学校だけの免許を持つ教員でも、その免許の教科を小学生に教えることはできるので、十分に対応は可能である。危惧するほどではないと思う。
- ・9年間の学びをみんなで支え、地域の交流室があるということは、これからの教育として良い形だと思う。また、真鶴が1小1中であることのメリットも生かせるのではないかとと思う。

### 勝山委員

- ・今後、子どもの数が減っていく中で、施設一体型で良いのかなと思う。義務教育学校か小中一貫型小中学校かについては、必要な敷地面積は同じだということなので、校長の人数、修業年限などを比較しながら考えていくしかないと思う。

- ・先日、台風への対応で小学校と中学校とで対応が違っていたが、義務教育学校にした場合、校長の判断で全学年が同じ対応を取ることになるのであれば、別々に校長がいたほうが運営がしやすいのではないかと感じた。

#### 藤井委員

- ・施設の形態としては一体型に賛成する。理由については、皆さんと同じなので割愛する。
- ・義務教育学校か小中一貫型小中学校かについては、より柔軟な義務教育学校にチャレンジするべきと思う。10年ほど前から神奈川県が、小中一貫教育校の実現に取り組んでおり、隣接校種免許状の取得促進の動きにより、取得条件が緩和されてきている。教員の小中免許取得状況は大槌学園の例も参考になると思うので、教員に負担のない形で進めていけばよい。指示系統については、副校長が3人体制で、その1人が総括担当ということなので、このあたりで柔軟な対応ができるのではないかと。教室の形態も、発達に応じたものになっているという事例があり、義務教育学校に期待したい。
- ・デメリットとして県西地区初になるという説明があったが、教育移住を考えた場合周辺にない学校は魅力で、真鶴町の大きな特長となりメリットとなるので、義務教育学校に期待する。

#### 玉田委員

- ・義務教育学校に賛成する。校長は1人だが、副校長が3人いるということなので、小学校と中学校とで別々の対応が必要であれば、そちらで考えていただけるのではないかと。新聞報道等でも先生のなり手が少ないと言われているが、このあと10年くらいすれば免許の仕組みも変わってくるのではないかと。先生が不足しているとしても、もしICT教育専用の教室を作るのであれば、オンラインで各教科のプロの先生から授業を受けることもできるのではないかと。
- ・県西地区初というのは、むしろ魅力的である。先日、移住フェアに参加してきたが、そこで聞いた話では、北海道の安平町では、新しくできた学校に入りたいということで移住者が増えていて、家が足りないくらいらしい。新しい学校に興味をもってくださいの方もいると思うので、県西地区初というのはチャレンジの意味も込めて、ぜひ進めていったら良いと思う。

#### 山口委員

- ・施設一体型には賛成する。理由は皆さんと同じである。ただし、義務教育学校か小中一貫型小中学校かは、今は判断できない。
- ・義務教育学校だと9年連続となり、今の小学6年生の区切りはなくなるのかを質問したい。  
(回答：そうなる。今のような6年生での卒業式はなくなる。)
- ・そこが少し気になる場所である。

#### 伊藤委員

- ・だいたい意見が出尽くしたようで、自分も施設一体型に賛成する。

- ・義務教育学校について、やってみたい気持ちはある。移住されてきた方の話を聞くと、自然豊かな環境の中で子どもを育てたいという方がすごく多い。そういう意味で、真鶴町のこういった新しい学校で子どもを育てたいからという、移住のきっかけにもなる。区切りについては、卒業式でなくても、何か工夫することで対応できるのではないかな。ぜひ、義務教育学校にチャレンジして欲しい。免許のことは心配であったが、竹原委員の話を聞き大丈夫かなと思った。今の先生たちは少し大変になるかも知れないが、調整しながら上手くやって欲しいと思う。

### 倉澤委員

- ・義務教育学校は理想で夢ではあるが、施設一体型になることによって当然子どもの生活環境は変わるので、まずは小中一貫型小中学校かなと思う。ステップを踏む必要があると思う。義務教育学校が良いのであれば、もっと広がっていくと思うが、やはりクリアしなければいけない課題があるのではないかな。開校のための準備や、続けていくための計画をしっかりと行わないと、始めた数年は良くても、そのあとのことを考えると、カリキュラムなどまだ課題は大きいのかなと考える。まずは、施設一体型で小中が一緒になって生活してみて、指導や連携を考えてみるのも良いと思う。子どもたちのことを思うと、いきなりの冒険は難しいだろう。一貫教育についての研究を教員間で進めているが、義務教育学校となると、もう少し慎重になる必要があると感じる。

### 露木委員

- ・施設一体型に賛成する。義務教育学校か小中一貫型小中学校かについては、教育課程の編成が最も魅力化につながる部分だと思う。6・3制ですずっとやってきた学校現場にとって、学年の区切りを4・3・2年として考えるのは非常に難しい。今までの考えからどこまで脱却し、今の子どもたちに合うカリキュラムを作ることができるのか、一番大事なところだと思う。免許の問題は何とか解消できると思うが、やはり教育課程の編成が最も重要だと思う。

### 上甲委員

- ・施設一体型にすることについて、費用対効果等を考え可能性が高いと思う。ただし、義務教育学校か小中一貫型小中学校かについては、まだ真鶴町がめざす教育像、教育理念、カリキュラム等が具現化されていない中で、判断は早いのかなと思う。運営する側ではなく、子どもたちにとって相応しい教育、真鶴らしい教育を実現するためには、どちらの形態が良いのかを話し合うべきだと思う。今はまだ、自分としての結論は出せない。

### 勝山委員

- ・これは一度決めたら変えられないのか。例えば、小中一貫型小中学校でスタートさせ、子どもの数がさらに減ってくるなど大きな変化が出てきた時に義務教育学校に変えるなど、切り替えることはできるのか。

(回答：変えることは可能。しかし、組織の違いから建築段階で職員室数等が違ってくる。)

### 藤井委員

- ・義務教育学校にした場合、すぐに4・3・2年制になるわけではなく、しばらくは6・3制のままにするなど、柔軟に対応できるのではないかと考える。校舎建設のことも、カリキュラム・教育課程のことも、論点を分けて考えたほうが良いのではないかと考える。

### 市川委員（進行）

- ・現段階では、施設一体型にするということが皆さんと確認できれば良いと考える。その先については、次回以降としたい。

### 瀬藤委員

- ・義務教育学校に賛成する。町の活性化や未来のためには、義務教育学校だろうと考える。ただし、皆さんが言われるように段階を踏みながら進めなければいけないところもある。学校現場で仕事をしてきて一番のハードルと感じることは、小学校と中学校の文化の違い、考え方の違いだと感じている。担任が1人で教える仕組みと教科担任制の仕組みは、それは長く培われたものであって、どちらが良い悪いというものでもない。一口に一貫教育校と言っても、それぞれに誇りをもっており、ハードルをなくすにはそれなりの時間が必要だろうと思う。十分な時間をかけ、カリキュラムや教育課程を考えていく必要がある。
- ・小中一貫型を施設一体型でやってみて、少しずつ義務教育学校にしてはどうかという考えもあるが、仮に今ある学校の場所に建てようとした場合、子どもたちはどちらかの校舎に移ることになり、その時点で小中学生は同じ校舎で、一緒に生活することになる。行事や日課などを見直すことになり、その数年間が義務教育学校への準備期間になるのではと考えている。いきなり義務教育学校と言っても難しい部分はあるだろうが、前段階があることを理解して欲しい。
- ・義務教育学校で副校長3人体制は一般的なパターンであるが、いろいろ調べる中で、校長は中学校籍、副校長は小学校籍、教頭2人はそれぞれ小学校部、中学校部に配置されることが多い。中学校籍の校長が多い理由は、卒業後の高校進学が関係しているから。9年間という発達段階の違いについては、今までの慣習が続けられるよう、管理職の配置で対応できるのではないかと考える。

### 市川委員（進行）

- ・義務教育学校にするか小中一貫型小中学校にするかは、次回以降への持ち越しとする。では、次に協議「一貫教育校の建設場所」について話し合いたいと思うが、その前に、事務局から「資料：学校建設候補地一覧」の説明をお願いする。

### 資料「学校建設候補地一覧」の説明（事務局から）

- ・まず、資料中「美の基準による高さ制限」を「土地利用規則基準による高さ制限」に訂正をお願いする。

- ・これは、学校建設の候補地である「現まなづる小学校」と「現真鶴中学校」の、敷地面積や高さ制限、施設のメリット・デメリットなどをまとめたもの。あくまで参考資料なので、現時点でこの2か所に絞り込んでいるというわけではないことを、ご理解いただきたい。
- ・建設場所を決める上で、敷地面積は重要なポイントになるが、建物の位置や水道の口径など、他の条件も踏まえながら、真鶴らしい理想の学校像を描く中で建設場所が決定されればと考えている。
- ・ここに示している以外でも、都市計画法や建築基準法など法律によって条件が加わるがあるので、今後はそのあたりも考慮していきたい。

#### 市川委員（進行）

- ・それでは、「一貫教育校の建設場所」について協議していきたいと思う。まず確認しておきたいことは、必ずしも今日の段階で建設場所を決定するものではないということ。
- ・今日の協議の中では、「どのような施設・設備が学校にあったら良いのか」「どのようなことができるスペースが学校にあったら良いのか」を中心に話し合い、そのあと、その実現の可能性を探った上で建設場所を決めていきたいと考えている。

#### 玉田委員

- ・子どもや地域の方など、約30人の方々に意見を聞いてきた。
- ・（地図を見せながら）子どもたちが建てたいと言ったところに赤のシール、大人の人たちが建てたいと言ったところに緑のシールが貼っている。子どもたちには、どんなところに学校があったら行きたくなるかなと聞いたところ、圧倒的に多かった意見が「自分の家の前」だった。「松本農園の近くが良い」「半島の先にあれば貝類博物館も学校の一部になるし、いつでも海の生物を見に行かれる」「お林展望公園が良い」など、とにかく多くの意見をいただき、楽しかった。
- ・「そもそもどういう授業をやるとか、どういう子どもを育てたいのかが決まらないと、いきなり建設場所と言われても困る」という意見や、「新しい学校って、そもそも建物なんですか」という意見もあった。「新しい建物を作ることが、新しい学校を作ることなのか。主要な場所は必要だろうが、教室をたくさん作らなくても、町内にある施設を上手に行き来することで対応もできるのではないか。」と話される方もいて、多様な意見を聞くことができた。
- ・現役の保護者には、新しい学校ができる頃には自分の子どもは通わないから、興味がないという人たちも多かった。どれだけこの取り組みに思いを寄せられるか。たぶん今、アンケートを配っても訳が分からず、ちゃんとした答えは出てこないと思う。今の保護者にどうやって興味をもってもらうか、そして、子どもたちにも関わってもらうことが必要だと思う。誰に焦点を当てるかを、きちんと絞って考えたほうが良いのではないかと思う。
- ・「自分たちの子どもは小・中どちらか一つの校舎に押し込められて、行事なども多少無理を強いられながら、卒業していくんだろうな」といった感想を漏らす保護者もいた。今の保護者を巻き込んでいくには、今の小中学校でも新しいカリキュラムなどを実践していく必要がある。

町民の方を巻き込んでいくことは、さらに難しく、どうやって進めていったら良いのか、この準備委員会でも話し合っていきたい。

#### 市川委員（進行）

- ・ 現実はやがて難しいということである。保護者アンケートの話も出たので、それも含めて意見があればお願いしたい。

#### 古川委員

- ・ 一体型の学校の建設場所として、敷地面積から考えると現真鶴中学校となるが、小学生に国道を渡らせるということを考えると、現まなづる小学校にできてくれたらなとも思う。
- ・ 水泳の授業も、これからはスクールバスでどこかほかのプールに行けば良いのかなと思う。しかし、この夏休みも、延500人くらいの子どもたちがプール開放に参加し楽しんでいたという話も聞いた。場所については、非常に悩んでいる。
- ・ 跡地をどうするかについても、一緒に考えていく必要があるだろう。自分には関係ないという意見もあるだろうが、学校を作っていく段階で子どもたちが関わることで、自分たちが作った学校だから、大きくなったら自分の子どもを通わせようと思うかも知れない。町民みんなに関わっていけるような学校づくりをしたいと考える。

#### 上甲委員

- ・ 資料の中で、位置のデメリットの欄にある「通学距離が遠くなる。跨線橋を渡る児童生徒が増える。」とは、城北地区の子どもが増えている現状で、何を基準にしているのか疑問である。分析を基に資料を出して欲しい。
- ・ これから真鶴町がめざす教育の魅力の一つは、地域の方々も教育に関わっていけることだと思う。だから今、在校している子どもたちにも建設に関わってもらいたい。冒頭にラグビーの話も出たが、ボールを持ってトライをめざす人も大事だが、ボールを持っていない人たちが何ができるのか、そこが一番大事だと思う。フォローであったり、カバーであったり、声を掛けることであったり。それが新しい学校への思いにつながっていくのだと思う。直接関わることはできなくても、間接的にでも何かできることがないのかを考えて欲しいし、それがみんなの学校づくりにつながると思う。そのためには、カリキュラムや理念などがキーとなってくる。

#### 倉澤委員

- ・ 長澤副委員長からの情報提供にもあったように、子どもだけが学ぶのではなく、町民みんなが学べる学校づくりを進めるべきだろう。生涯学習の拠点であったり、高齢者だけでなく若者の居場所にもなったりする学校を作ることが大切で、子どもが学習で使うだけでなく、町民が希望する時に使えるスペースが必要だと思う。そう考えると、どんな学校にしたいか話題にすることで、町民みんなの問題意識も出てくるのではないだろうか。

### 朝倉委員

- ・小学3年生の孫は朝6時20分頃、バスで移転先の学校に通っている。
- ・まなづる小学校も真鶴中学校も、ここ50~60年の間、災害的には安全だった。どちらの場所も津波は大丈夫。崖崩れは、まなづる小学校のほうは少し危ないか。安心という視点で考えると、真鶴中学校になる。学校以外の場所にすると崖崩れや津波の心配があり、地質学調査なども行わなければいけない。先の大震災の時には真鶴小学校にも岩小学校にも、幾人か亡くなられた方がいた。安全面が一番考える必要があると思う。
- ・費用面を考えると、小学校を仮校舎にして中学校を壊すほうが、一番費用が抑えられるのではないか。また、建物を壊す費用が、以前もらった資料だと非常に高い見積もりになっている。解体費用が坪当たり197万円、跡地整備が92万4千円になっている。融資を30年やってきたが、どう考えても高い気がする。
- ・全体としての効率などを考えると、真鶴中学校を壊し、まなづる小学校を仮校舎にすることが相応しいと思う。

### 勝山委員

- ・子ども目線で考えると、中学校にした場合、ダンプが往来するカーブにある横断歩道などが、小学生にとって危険である。町として信号をつけてもらえるのかなどの確認を取ることで、安心材料になるのではないか。小学校の近くを通るダンプは、たぶん登校時間とずらして走ってくれていると思う。中学校側ではそうもいかないのが、安全面で心配である。
- ・災害時、歩道橋が崩れた時、真鶴町内で中学校側に出るには1本の道しかなくなり、どうやって子どもを迎えに行くのかも考えて欲しい。そこがクリアできれば、真鶴中学校でも良いと思うが、クリアできなければまなづる小学校かなとも思う。旧保健センター前の横断歩道はカーブになっており、保護者からは怖いという声も聞く。県との調整も必要になってくるだろうが、学校周辺を整備し、安心材料として示してもらいたい。

### 伊藤委員

- ・皆さんに、自分たちの学校だよということを考えて欲しい。
- ・教育を語り合う会をやった時に、たくさんの方が参加された。コミュニティスクールという考え方の中で、地域の方も一緒に学べる場所、楽しめる場所にして欲しいという意見がたくさんあった。子どもがいない方も、学校に学びの場所が欲しいという気持ちがあると思う。コミュニティスクールにするのであれば、広いスペースも必要になってくる。まずは、コミュニティスクールにするかどうかを決めないと、場所は決められないのかなと思う。
- ・プールについては、体育の種目として選べるようになっているわけで、必ずしも設置しなくても良いと思う。また、水泳を行うのであれば、ほかの市町村の公営でも民営でも使うことはできる。プールは維持・管理が大変でもあり、作らないと決めてしまえば、その部分を何かに回すこともできる。
- ・まずは、町全体の人が集える場所を考えることが最初だと思う。

#### 山口委員

- ・地域の方も使える学校ということで考えてきた。夢を語らせてもらおうと、ここ町民センターにはまなサポや講堂もあり、役場も近いので、この周辺一帯をいろいろな施設も含めて学校として考えたらどうかと思う。現実的ではないと思うが、一つの考え方として捉えて欲しい。

#### 竹原委員

- ・10年後に新しい校舎ができるとして、それまでの期間はコミュニティスクールの土台を作る時だと思う。施設一体型を想定してコミュニティスクールとして動き出しておけば、そこで教育ビジョンを共有したり、カリキュラムを考えたり、どんな子どもを育てたいのかとか、学校の土壌ができるはずである。手をこまねいていないで、今の段階で小中一緒に考える場を作ることが大切。今は小中施設は分かれているが、真鶴町の一つの学校として学校運営協議会を立ち上げることは可能なので、それが有効だと思う。まだ時間があるので、意見を交換したり関わったり、ハードに対する提案をしたり、それを繰り返していくことで自分の学校になっていく。そのような場面をたくさん作っていけば、自ずと義務教育学校は自然にできてくると思う。教育大綱、教育振興基本計画を指針にしながら、もっともっと話し合いを重ねていくと、先生方も理解するしカリキュラムも見えてくる。コミュニティスクールを先に立ち上げることは、有効だと思う。コミュニティスクールには空間があるわけではなく、それは中身を充実させていく仕組みだと思う。

#### 藤井委員

- ・建設候補地の立地条件の整理をして、解像度をもう一段階上げたいと思う。
- ・周辺の道路や住宅からのアクセス、コミュニティバスのルート、既存公共施設などの資源との関係性などを比較したい。また、建物の中から見える景色がどういったものなのかも、大切にしたい要素である。ほかの学校の事例を見て、校舎のデザインも重要だが、真鶴の場合、景色を見るということも重要な要素である。その視点からは、小学校敷地に期待するところもある。海やお林が見えるという環境は魅力である。一方で中学校敷地は駅に近く、人の流れという面では高校生や電車を使う大人も使いやすいのではないかな。
- ・景色、他施設との関係性、人の流れ、周辺道路、アクセスなどをもう少し深掘りし、皆さんと議論できたらと思う。

#### 露木委員

- ・小学校では、まだ学校評議員という形を取っているが、コミュニティスクール立ち上げに向けて準備を進めている。前回の話し合いの中でも、町としてどのような子どもを育てたいのかという素朴な質問もあり、基礎的な部分を考えているところである。

- ・高齢化社会が進んでいく中で、みんなが学べる学校、みんなで子どもを見守る学校が、真鶴には相応しいのではないかと思う。北海道の事例など、ワクワクしながら聞いていた。町として、どんな学校であるべきかということ、もう一度洗い直す必要があるのかなと思う。

#### 額瀨委員

- ・貴重な意見をたくさんいただいたので、改めて整理し次回に提示させていただく。
- ・先ほど関心がない方も多という話もあったが、現段階では当然のことだと思うし、時間を掛け、みんなを巻き込みながら進めていくものだと思う。みんなの学校であるという意識を、これからどう浸透させていくかがポイントになる。教育委員会としても、学校の先生や子どもたちからも意見を聞いてみよう、今、学校と調整中であり、その報告もしていきたい。
- ・アンケートについては、それほど浸透していない中で回答できない方もいると思うが、あえてこの段階で取ることによって、今の状況を把握し、これからの取り組みのヒントにしていきたい。結局、待っているだけでは浸透していかない、こちらからいろいろなアプローチをしていくことが大切だと考えている。教育を語り合う会もその一つである。アンケートは一度きりではなく、何回か行う予定である。結果については、保護者にも還元し、準備委員会でも次回、報告できればと考えている。

#### 勝山委員

- ・アンケートを行うことは構わないが、みんなで考えていくということであれば、中学生くらいには分かる言葉にして欲しい。子どもが親になった時にも関わっていく学校なので、親子で検討ができると良いと思う。

#### 藤井委員

- ・アンケートの内容で、「令和12年4月」という時期を、言い切ってしまうといいのか気になる。また、アンケートを配る時に、単純に意見を聞くだけではなく、町からの情報提供も一緒に行えると、子どもと話し合うきっかけにもなるのではないかと。町HPの準備委員会や語り合う会の特集記事にリンクしたり、平成28年度に真鶴町が県の小中一貫教育モデル校になっていることなど、時間をかけて取り組んできたということを保護者に伝えれば、より発展性のあるアンケートになると思う。

#### 玉田委員

- ・子どもと一緒に考えられるということは、とても重要だと思った。QRコードなどを入れていただくのも良いと思ったが、忙しい保護者がもう一つアクションを起こすことは大変なこと。そこで、学校での懇談会などで先生から一声掛けてから配るなどしてもらえると良いと思う。2年ほど前のアンケートも、何の前触れもなく戸惑った保護者が多かったと記憶している。アンケートも意味のあるものにしていかないと駄目な気がする。11月の教育を語り合う会でも協力をお願いするなど、少しでも町民が気に留める方法を考えて欲しい。

#### 勝山委員

- ・幼稚園、小学校は運動会を使ったらどうか。中学校は学習活動発表会が使えるのではないかな。

#### 瀬瀬委員

- ・幼小中、保育園も含めて、10月、11月の機会を捉えてPRをしていきたい。

#### 倉澤委員

- ・確認として、幼稚園・保育園の場合は、湯河原町から来ている家庭は対象としないことで良いか。（良い）
- ・幼保小中とも家庭数という考え方で良いか。（良い）

#### 市川委員（進行）

- ・アンケートについては、事務局で修正を行い実施することとする。
- ・「その他」ということで、事務局から次回の日程とテーマについて提案をお願いします。

#### 次回の日程・テーマについて（事務局）

- ・次回、第3回準備委員会は12月12日（火）14:00から。会場はここ第2会議室か3階の講堂。
- ・テーマは、今日の話し合いを受けての「一貫教育校の建設場所」について、「幼稚園・保育園の将来と一貫教育校」について、そして、これまでの話し合いや「教育を語り合う会」で出された意見を基にした「一貫教育校の基本理念」について検討したいと考えている。また、アンケート結果についても報告ができるかと思う。いかがか。（承認）

#### 倉澤委員

- ・要望として、今日も時間が伸びているが、じっくり話し合うゆとりも必要だと思うので、始まりを30分早めるとか考えてみたらどうか。途中で抜けてしまう委員さんがいるのは、非常に残念である。お子さんのいる委員さんもいるので、あまり遅くならないほうが良いと考える。  
（事務局から回答：少し早めに設定したいと思う。）

#### 長澤副委員長

- ・熱心な議論を受け、2つ話をしたい。まず、場所について。外部の人間から見ると、電車に乗って来て真鶴の町が見え、シンボルとしての学校が見えるというのは印象的。学校から見える景色という話があったが、そう感じる者がいるということも知っておいて欲しい。もう一つは、みんなが学ぶ資源が町の中にあり、それを有機的につなぐことで、真鶴というエリア全体が学校になるということ。子どもも大人も学ぶような仕組みづくりを、これから検討してもらえると良いかなと思った。

## 市川委員（進行）

- ・協議はこれで終了とする。

## 事務局

- ・改めて次回を確認をさせていただく。
- ・次回は12月12日（火）、時間は午後1時30分開会としたい。終わりは4時を目途としたい。会場は傍聴の方の数によって、ここ第2会議室にするか3階の講堂にするか決めたいと考えている。テーマは、「一貫教育校の建設場所」について、「幼稚園・保育園の将来と一貫教育校」について、「一貫教育校の基本理念」についてとする。
- ・ちなみに、第4回準備委員会は来年3月22日（金）を、次回「教育を語り合う会」は11月18日（土）9:30からを予定している。
- ・これをもって「第2回学校建設準備委員会」を終了とさせていただく。ありがとうございました。